(別記様式)

令和５年度　府立中丹支援学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（　計画段階　・　実施段階　）

学校経営方針（中期経営目標）	前 年 度 の 成 果 と 課 題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
学校教育目標 ～いどむ　つながる　かがやく～ ・主体的に学ぶことも含め、未来に向かって挑戦してほしい ・いろいろな人とともに歩んでほしい ・幸福な生き方をつくりだすことで自分らしい輝きを増してほしい このような児童生徒を育てるために、小・中・高の系統性を持たせた指導にあたる。 小学部では基礎となる力を身に付ける「基礎・意欲」を大切に。 中学部では身に付けた力を広げる、深める「発展・可能性」の段階へ。 高等部では自立や社会参加に必要な力へと高める「統合・個性」へと発展させていく。	○児童生徒一人一人の小さな体調変化も見逃すことなく、対応することで、新型コロナウイルス感染症を大きく広げることなく、学校運営を行うことができた。 ○危機管理意識の面では、ヒヤリハット事象が何件かあり、さらなる意識の向上が必要である。 学校経営 １　働き方改革推進会議が中心となり、様々な分掌と連携しながら施策(育児(自)の日を月２回、回議書の整理、会議の精選)を実施し、超過勤務は減少した。今後は「働きがいのある職場」にしていくことが求められる。 ２　学校運営協議会で委員より様々な意見をいただき、地域とともに歩むためのヒントを得ることができた。 教育活動 １　研究部を中心に研究活動を進め、他学部の実践も聞くことで12年間の系統性ある教育課程の検討ができた。今後、具現化していかなければならない。 ２　コロナ禍の中、制約もあったが高等部においては職場体験、実習の機会を多く設けることができ、生徒の進路選択に役立った。中学部においても地域学習を実施することができた。 ３　学校生活の様々な場面で、タブレット端末を使った実践を行うことができた。	学校経営 １　引き続き働き方改革に取り組む。 アンケート等を実施することにより、教職員の多忙観、負担感を把握した上で、より働きがいのある職場を創っていく。 ２　学校運営協議会との連携 学校運営協議会と連携し、将来地域で生きていくために何ができるか、具体的な方策を検討、実施する。 ３　ウィズコロナ時代の学校経営 コロナ前に戻すのではなく、取組を取捨選択し、残すもの、方法を変えるもの等を検討する。 ４　学校からの発信 学校の取組をメディアに発信することにより、本校の児童生徒のことをより多くの人に知ってもらう。 教育活動 １　12年間を見通した教育課程の編成 高等部卒業後を見通した指導を小学部段階から進めていく。 ２　障害特性に応じた専門的な指導 肢体不自由、自閉症スペクトラム等の障害特性に応じた 指導ができる教員を育成する。 ３　ICT機器の活用 学校生活全般をとおして、ICT機器を活用することで、児童生徒の情報活用能力を向上させていく。 ４　地域と連携した教育 地域の関係機関との連携を図り、体験的な学習や職場体験・実習等の機会拡大を図り、児童生徒の力を伸ばす

<table>
<tr><th>評価領域</th><th>重　点　目　標</th><th>具　体　的　方　策</th><th colspan="3">評価</th><th>成　果　と　課　題</th></tr>
<tr><td rowspan="4">学校経営</td><td>働き方改革に引き続き取り組む</td><td>アンケート等を実施することにより、教職員の多忙観、負担感を把握した上で、より働きがいのある職場を創っていく。</td><td>B</td><td rowspan="4">B</td><td rowspan="8">B</td><td rowspan="4">・　衛生委員会とも連携を図り、働き方についてのアンケートから本校の現状を把握できた。今後は「働きがいのある職場」にするための具体的な方策が求められる。
・　学校運営協議会で委員より様々な意見をいただき、地域とともに歩むためのヒントを得ることができた。
・　コロナの５類移行後は、コロナ禍に進んだICT、アプリの活用も行いながら様々な取組を進めることができた。今後もコロナ前にすべて戻すのではなく、スクラップアンドビルドで考えていく。
・　40周年記念の取組をきっかけにして学校HPを充実させることができ、地域への発信、理解啓発の推進が図れた。</td></tr>
<tr><td>学校運営協議会との連携</td><td>学校運営協議会と連携し、将来地域で生きていくために何ができるか、具体的な方策を検討、実施する。</td><td>A</td></tr>
<tr><td>ウィズコロナ時代の学校経営</td><td>コロナ前に戻すのではなく、取組を取捨選択し、残すもの、方法を変えるもの等を検討する。</td><td>B</td></tr>
<tr><td>学校からの発信</td><td>学校の取組をメディアに発信することにより、本校の児童生徒のことをより多くの人に知ってもらう。</td><td>A</td></tr>
<tr><td rowspan="4">教育活動</td><td>12年間を見通した教育課程の編成</td><td>高等部卒業後を見通した指導を小学部段階から進めていく。</td><td>B</td><td rowspan="4">B</td><td rowspan="4">・　「思考力の育成」をテーマにした研究活動をとおして、系統性のある授業づくりについての検討ができた。今後も学校教育目標の実現を目指す授業づくりを行っていく。
・　研究部の活動や校内の研修等から学び、授業改善が一定進んできているが、今後もすべての教員が専門性のある指導ができるよう、継続して学ぶ必要がある。
・　タブレット端末を使用した授業づくりがさらに進んだ。ICT機器を単に使用するだけではなく、情報活用能力が向上するためのICT機器の使用として、授業づくりを行う必要がある。
・　地域と連動した取組や、外部と関係する取組に積極的にチャレンジし、地域とのつながりが深まった。今後は地域とのつながりを一過性のものとせず、定着させていくことが必要である。</td></tr>
<tr><td>障害特性に応じた専門的な指導</td><td>肢体不自由、自閉症スペクトラム等の障害特性に応じた指導ができる教員を育成する。</td><td>B</td></tr>
<tr><td>ICT機器の活用</td><td>学校生活全般をとおして、ICT機器を活用することで、児童生徒の情報活用能力を向上させていく。</td><td>B</td></tr>
<tr><td>地域と連携した教育</td><td>地域の関係機関との連携を図り、体験的な学習や職場体験・実習等の機会拡大を図り、児童生徒の力を伸ばす</td><td>A</td></tr>
</table>

学校関係者評価委員会による評価	・地域とどのようにつながっていくか。より具体的に進めていく必要がある。 ・連絡アプリ（CoDMON）の活用（ICT）が進んでいる。 ・ファンディング事業等、もっと具体的にアピールすることが必要である。 ・アンケートの回収率が大幅にアップしたことはよかったが、さらにすすんで、教員や子どもたち自身、また、学部ごとに項目を変えるなどしてアンケートを実施するとよい。学校側の目標も事前に示し、保護者と学校の目指すことの共通理解を図る。

次年度に向けた改善の方向性	・学校教育目標をより知ってもらうこと、また、令和5年度に取り組んできたスポーツ、文化芸術活動等をさらに推進するなど、学校教育目標を具現化する取組をとおして、特色ある学校づくりを行っていく。 ・「地域」＝「生活の場」となることを見据え、地域とのつながりは今後も大切にし、地域とのつながりをより強固にするためにも、地域資源を活用した取組を継続する。 ・学校は、「こんな取組をしている」、「こんな児童生徒がいる」ということをさらにアピールし、誇りをもって学校、地域生活が送れるようにしていく。